

5

課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
17107006	更新世から縄文・弥生期にかけての日本人の変遷に関する総合的研究	溝口 優司 (国立科学博物館・人類研究部・室長)	B

(意見等)

当初、6つの研究課題を設定していたが、全般的に進捗状況が懸念される。

- (1) 更新世人骨の研究は特定領域「日本人の起源」の結果を踏襲している感があり、また当初計画になかった旧石器時代人骨の発掘調査が今回でてきた。当初計画の実効性からみて、このような大きな課題変更をするのは適当ではないと考える。このハナンダー洞穴の発掘調査は、研究費の使用法からも疑念がもたれ、すみやかに発掘調査を中止し、本来の研究目的に沿った研究を継続するべきと考える。
- (2) 古代DNA解析については、旧石器時代人と早期縄文人との関係、北海道の縄文時代中・後・晩期、弥生時代の集団系統解析をおこなう計画であり、中間報告として、古い時代の人骨のDNA抽出にも成功しており、今後分析数を増やし、十分な成果が出てくることを期待する。また北海道人骨ばかりでなく、国立科学博物館に保管されている本州の縄文人を重点的に行うことも視野にいれるべきである。
- (3) 人骨の形態解析として、CT解析グループが組織されており、中間報告では、更新世人骨のCT解析で基礎的研究法が確立がされたことを示しており、今後の精力的な解析を望む。特に脳頭蓋内腔の鋳型作成だけでなく、特異な形態を示す四肢骨に焦点を合わせて研究も合わせて推進することも必要である。
- (4) 「新たな日本人形成過程シナリオを構築する」という点において、縄文末から弥生時代にかけて較正年代(歴年代)の大幅な修正により、弥生人渡来説のシミュレーションが再検討されており、今後の研究成果を期待する。

6

課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
17108001	非病原力遺伝子のサプレッサー活性発現機構の解明と植物病害防除への応用	露無 慎二 (静岡大学・創造科学技術大学院・教授)	A

(意見等)

本研究は、本研究代表者が提唱した「非病原力遺伝子二元説」に基づき、さらにそれを多くの病原菌-植物種の系で実証しようとするとともに、非病原性遺伝子産物による一般的抵抗性反応誘導の抑制機構を明らかにし、それらの知見を基に新しい戦略に基づく耐病性植物作出を目指すものである。

本研究では、各種の非病原力因子遺伝子が抵抗性誘導のサプレッサーとなることを明らかにした。また、非病原力因子の一つ Ap11 はペクチンメチルエステラーゼ並びに RIN4 と結合し、それらのプロセッシングに関与することを明らかにした。これらの関連の成果は学術的評価の高い国際誌に発表されており、研究は当初の計画に沿って順調に進展していると評価できる。

本研究計画の終盤では耐病性イネの育成まで広範な研究計画が示されているが、現時点においてはその具体的道筋は明確でない。非病原性遺伝子のサプレッサー活性発現機構の重要性、本研究分野における波及効果等を考慮するならば、耐病性イネの栽培や安全性試験等より、非病原力因子の作用メカニズムの解明により力を注ぐことが望まれる。